三界の真髄，　世間の灯明となるだろう」　と言った。　そこで

Kś.　: hjig rten gsum gyi sñiṅ po　hgro baḥi sgron du ḥgyur /　ses gsuṅs so /　de nas

Div.　: trilokasāro　jagataḥ pradīpaḥ /　yadā ca

正等覚者ディーパンカラによって

Kś.　:　yaṅ dag par rdzogs paḥi saṅs rgyas mar me mdzad kyis

Div.　: sa Sumatir māṇavo　Dīpaṅkareṇa samyaksaṃbuddhena

バラモン青年スマティは　授記されるやいなや，

Kś.　: bram zeḥi khyeḥu blo gros bzaṅ po　luṅ bstan ma thag pa

Div.　:　vyākṛtas tatsamakālam eva

彼のいるところから　空中に　七ターラ　樹の高さに　昇った。

Kś.　: deḥi mod kho na la　nam mkhaḥ la ta la bdun srid tsam du　hphags so /

Div.　:　vaihāyasam saptatālān　abhyudgataḥ /

そこで　彼の髪はなくなり，新しくもっと　優れた髪が　生じた。

Kś.　: de nas deḥi skra byi nas　skra sar khyad par du hphags pa　byuṅ no /

Div.　: tāś ca-asya jaṭāḥ śīrṇāḥ　anyāḥ praviśiṣṭatarāḥ jaṭāḥ　prādurbhūtāḥ /

(40)　『増一阿含』二〇・三（巻十一）『大正』二，597上－599下；*Mahāvastu*, vol. I, pp.193－248 (Dīpaṅkaravastu); *Apadāna*, vol. II, pp.429－431 (Dhammaruci).

(41)　杉本卓州「神 Deva と呼ばれた仏陀」参照。

(42)　D. vol.15, p.201, fol.85a$^{3-4}$ (P Vol.39, p.171, fol.92b$^{4-5}$)

(43)　D. vol.15, p.202, fol.90b$^{6-7}$ (P Vol.39, p.173, fol.98a^{8}-98b^{2})

(44)　平川前掲書 p.166, 14～15行目，及び田賀前掲書 p.168, 4行目～p.169参照。

(45)　岩本前掲書 p.21参照。

(46)　杉本『撰集百縁経』p.35参照。ただし Avś. を Div. と同じ有部系の資料とすることを疑問視する意見もある（平岡「アヴァダーナ文献に見られる仏陀の誓願とその問題」参照)。

ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論における社会観再考

桑　原　　司

一　問題の所在

いわゆるシカゴ・ルネサンスの一翼をなす[1]ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論[2]が，T・パーソンズを中心とする構造機能主義社会学や，G・A・ランドバーグを中心とする社会学的実証主義（操作主義）を批判し，それに代わる分析枠組や研究手法を発展させようとしたことは良く知られている。とりわけその分析枠組に関しては，これまでの日本の研究においては，それが提示する「主体的人間」像と「動的社会」観が高く評価されてきた[3]。

とはいえ他方で，ブルーマーのシンボリック相互作用論に対しては，かねてより「主観主義」批判と「ミクロ主義」批判という二つの批判が寄せられてきた（船津，1993年，45頁)。このうち，前者の批判に関しては，ブルーマー自身の反論（Blumer, 1977, 1980）を手掛かりとして，既に我々が別稿において詳細な検討を加えている（桑原，1996年b)。本稿が問題とするのは後者の批判に他ならない。

ブルーマーのシンボリック相互作用論に対して，それが「ミクロ主義である」とする批判が寄せられてきたことは既に船津によって指摘されている（船津，1993年，57頁)。例えば1）J・ターナーは，ブルーマーのシンボリック相互作用論が「ミクロな相互作用過程を強調する方法論を採用してきた」(Turner, 1974 [1992, p.115]）と，その分析枠組では大規模な相互作用過程を分析することが困難であるということを指摘しているし(Blumer, 1975 [1992, pp.124-5]), 2）またスメルサーは，社会学的な分析の中心には社会構造についての考察が置かれるべきであるのに「ブルーマーは，そうした立場〔社会構造を取り扱うという社会学者の立場〕から，社会学者として可能な限り最も離れたところに位置した。我々がウェーバーにおいて見い出したような，主観的立場から構造的立場へと移行する努力は，ブルーマーには全く見受けられない。………如何なる社会現象もそれを担う個々人の意味の体系という文脈において把握されるべきであると

いう〔社会学者一般とは〕異なった研究手法を取ろうとするがために，シンボリック相互作用論が有するパースペクティブは，〔主観的立場から構造的立場へと移行する〕全ての可能性を，そしてシンボリック相互作用論が科学というステータスを得る全ての可能性を否定してしまった」(Smelser, 1988, p.122）と，ブルーマーを批判している。すなわち，ブルーマーのシンボリック相互作用論には社会構造を分析する枠組が欠如していることを，スメルサーは論難しているわけである。3）さらにルイスによれば，ブルーマーのシンボリック相互作用論は，そうした社会構造が個人に対して与える影響も看過している傾向があるという（Lewis, 1976 [1992, p.148])。

以上のように，ブルーマーのシンボリック相互作用論に寄せられているミクロ主義批判には，1）マクロな社会を分析する枠組の欠如を論難するもの，2）社会構造を分析する枠組の欠如を論難するもの，3）その社会構造が個人に対して与える影響を分析する枠組の欠如を論難するもの，という三つのヴァリエーションがある。

こうした三つの批判のうち，本稿が問題とするのは第二の批判である[4]。とはいえ，この第二の批判に対して，ブルーマーのシンボリック相互作用論のなかに既存の「社会構造」概念を導入することによってこたえようとするのが本稿の目的なのではない。その理由は以下の通りである。

前記第二のような批判に対して，シンボリック相互作用論のなかに「社会構造」概念を導入することによってこたえようとする試みは，これまで数多くのシンボリック相互作用論者達によってなされてきた（船津，1989年，第15章第1節参照)。そうした“シンボリック相互作用論者”による論考の代表格としてS・ストライカーの論考（Stryker, 1980）が挙げられる。ところが，ストライカーの論考に対しては，次のような批判が寄せられるに至ってしまった。すなわち，彼が「固定的で拘束的」なイメージを有する「社会構造」概念を自らの理論枠組に取り入れたがために，彼の理論枠組は「シンボリック相互作用論の特徴となっているダイナミックな社会観が欠如」したものとなってしまい，その結果として彼の理論枠組は「構造的アプローチの静的傾向」を有する「T・パーソンズの思考と変わらないもの」となってしまった（船津，1989年，236－7頁)。つまり「せっかく導入された『社会構造』の概念がシンボリック相互作用論の性格と必ずしも適合せず，むしろ，従来の社会学において描かれてきたものと大差ないもの」となってしまった（船津，1989年，236頁)，とする批判がストライカーの理論枠組みに

対して寄せられてしまったわけである。

T・パーソンズの社会構造概念に代表される「静的・固定的社会」観を批判し，その対極に理論化しようとしたのが，シンボリック相互作用論の「動的・過程的社会」観（船津，1976年；1989年，247頁)，すなわち「社会」を，変化・変容のなされる流動的な過程（船津，1993年，55頁）ないしは「変動的」「生成発展的」なもの（船津，1976年，32，263頁）と捉える社会観に他ならない。にもかかわらず，そうしたシンボリック相互作用論の分析枠組に，安易に“既存の”「社会構造」概念の導入を試みれば，まさにストライカーの二の舞を踏むことになりかねない。

我々の目的は，以下のことをブルーマーのシンボリック相互作用論にそくして証明することにある。

すなわち，シンボリック相互作用論という視点を採用するなら，社会は“必然的に”「動的・過程的なもの」として捉えられなければならない。

こうしたことが明らかにされれば[5]，“既存の”「社会構造」概念がそもそもシンボリック相互作用論の社会観が有する性格とは相容れないものである（船津，1989年，236，237頁）ということが明らかになる。その結果としてさらに，シンボリック相互作用論に対してかねてより寄せられてきた前記第二のような批判が，そもそもシンボリック相互作用論に対する批判として妥当なものではないということも自ずから明らかになる。

ところで，上述の課題を遂行するに際して看過してはならない重要な論点がある。それは，ブルーマーのシンボリック相互作用論において，社会が動的・過程的なものとして捉えられなければならない必然性を，ブルーマーのシンボリック相互作用論の概念的柱石となっている[6]「自己相互作用」(self interaction）概念との確固たる結びつきのもとに明らかにしなければならないという論点である。では何故にそうした論点を看過してはならないのか。何故なら，そうした論点を看過すれば，結局のところ，その社会の作動原理を，諸個人の行為から切り離されて捉えられた社会それ自体のメカニズムに帰着するものとして捉えてしまうことになるからである。ところがそうした立場はまさにブルーマーが批判したものであった。ブルーマーは社会というものを「それ自体の原理にしたがって作動」する「一種の自己作動的実体」ないしは「ひとつのシステムとしての性質を有する」ものと認識する立場を「重大な誤りである」と痛烈に批判している（Blumer, 1969, p.19)。ブルーマーによれば「〔ある社会の〕ネットワークや制度は，その

社会が有する何らかの内的な原理やシステムの要件などによって自動的に機能するわけではない。それが機能するのは，様々な位置を占める人々が何らかのことを行うからなのである。そして彼等が何を行うかは，彼等が自らの行為状況を〔自己相互作用を通じて〕如何に定義するか次第なのである」(Blumer, 1969, p.19)。

まさに伊藤も言うように，ブルーマーが指摘してやまない社会学における最大の問題とは「こうした過程〔自己相互作用の過程〕を等閑視して，社会的相互作用を語り，マクロな社会の形成・存立・変動を語ることの無意味さ」(伊藤，1995年a，120頁）なのである（Blumer, 1969, pp.19-20, 74-6, 88-9）。こうしたブルーマーの立場を説得的に提示するためにも，社会が動的・過程的なものとして把握されなければならない所以を，自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに明らかにしなければならないのである。

二　ジョイント・アクションとしての社会

そもそもブルーマーのシンボリック相互作用論において社会なるものは如何なるものとして把握されていたのか。そこから議論を始めなければならないだろう。このことを明らかにする上で，ブルーマーの以下の説明が参考となる。

「私は『ジョイント・アクション』(joint action) という用語を，ミードの『社会的行為』(social act) という用語の代わりに用いる。この用語が示しているのは，個々人が各々の行動を適合させ合うことから成り立つ，行為のいっそう大きな集合的形態のことである。………ジョイント・アクションには，二人の個人の単純な共同から，大規模な組織や機関による行為の複雑な配列化までが含まれている。………事実こういった〔ジョイント・アクションの〕実例の全体が，その無限の多様性と可変的な結びつきと複雑なネットワークとによって，一つの社会を形づくっているのである。………ミードにとって社会的行為とは社会の基本的単位だったのである。したがってそれを分析すれば，社会の全体的な特性が明らかになる。」(Blumer, 1969, p.70)

以上のブルーマーによる説明において示された論点を補足しつつ整理すれば以下のように捉えられよう。

1）ジョイント・アクションとは，行為のいっそう大きな集合的形態のことを意味する。

2）そうしたジョイント・アクションは，その形成に参与する個々人が，自ら

の行動ないしは行為を適合させ合うことから成り立つ。したがって，その形成に参与している個々人は，自らの行為を他者達の行為に適合させなければならないことになる[7]。

3）ジョイント・アクションの担い手には，個人のみならず，大規模な組織や機関も含まれる。

4）したがって，ジョイント・アクションには，個々人の単純な共同から，大規模な組織や機関による行為の複雑な配列化までが含まれている。

5）このようなジョイント・アクションが，他のジョイント・アクションと結びつくことによって，一つの社会が形づくられている（この点については［Blumer, 1969, pp.16-20］も参照されたい）。

6）したがって，ジョイント・アクションは，社会の基本的単位であり，それを分析すれば，社会の全体的な特性が明らかになる。

7）したがって社会の性質の如何は，それを構成するジョイント・アクションの性質の如何によって決定されることになる。

では，ブルーマーにおいては，そのようなジョイント・アクションの成立は如何にして可能であると捉えられていたのか。以下そのことについて考察して行きたい。

ブルーマーによれば，ジョイント・アクションの形成は，「シンボリックな相互作用」(symbolic interaction) においてなされる。ここでシンボリックな相互作用とは，ブルーマーにおいては，ある「身振り」(gesture) の显示と，その身振りの「意味」(meaning) に対するひとつの反応として定式化されている。さらに身振りは，それを発する個人とそれが向けられる個人の双方に対して意味を持ち，両者に対して身振りが同じ意味を持つとき，両者は相互に理解し合っている，とブルーマーにおいては捉えられている（Blumer, 1969, p.9）。ブルーマーによれば，こうした身振りは，それを発する者とそれが向けられる者との双方に対して次のような三つの意味を有している（Blumer, 1969, p.9）。まず第一に，(a)身振りの意味は，それが向けられた個人が何をするべきかを表す。第二に，(b)その身振りを発している個人が何をしようと考えているのかを表す。そして第三に，(c)この両者の行為が接合されることによって生じるジョイント・アクションの形態を表す（Blumer, 1969, p.9）。それをブルーマーは次のように例証している。

「例えばある強盗が，被害者に向かって両手をあげろと命令するとき，その命

令〔＝身振り〕は次の三つのことを表している。すなわち，(a)被害者がこれから行うべきこと〔つまり，両手を挙げる，という行為〕，(b)強盗がこれから行おうと考えていること。すなわち，被害者からお金を奪い取ること，(c)両者の間で形成されようとしているジョイント・アクションの形態。この場合は強盗である。」(Blumer, 1969, p.9)

ブルーマーによれば，身振りが有するこうした三つの意味を，身振りを発している者と身振りが向けられている者の双方が“適切に把握”し，その意味に基づいて互いに行為し合うとき，そこにジョイント・アクションが成立するという（Blumer, 1969, p.9）。またここで身振りの意味を“適切に把握”するとは，身振りを発している者と，それが向けられている者の双方が，その身振りに対して同じ意味を付与することを意味している（Blumer, 1967［1992, p.52］; 1993, p.163, 179）。さらにこうした意味付与が，双方の「自己相互作用」(self interaction) の過程を通してなされているものと捉えられていることは言うまでもない（Blumer, 1969, p.14, 79, 80）。

では，身振りを発している者と身振りが向けられている者の双方が身振りの意味を“適切に把握”することは如何にして可能なのであろうか。この点について，身振りを発している者を個人A，身振りが向けられている者を個人Bとし，以下，議論してゆくことにしよう。

個人Aが何らかの身振りを個人Bに対して発している場合を想定してみよう。個人Bの立場に立って考察するならば，個人Bが，個人Aから発せられている身振りの意味を適切に把握しようと思えば，換言すれば，身振りを発している個人Aがその身振りに対して付与している意味と同じ意味を，個人Bがその身振りに付与しようと思えば，個人Bは，個人Aが如何なる意味をその身振りに付与しているのかを「考慮」(taking into account) しなければならない[8]。ところで，何かに意味を付与するということは，その何かをある一定の「パースペクティブ」(perspective)にしたがって知覚する(perceive)ということと同義であるから[9]，個人Bが考慮しなければならないものは，個人Aがその身振りを知覚する際に用いている個人Aのパースペクティブであるということになる。つまり，個人Bは個人Aのパースペクティブを考慮し，そのパースペクティブを用いて，個人Aが発している身振りを知覚しなければならないことになる。他方，個人Aに即して考察するなら，個人Aは，個人Bに対して身振りを発する際には，個人Bが個人Aの発する身振りに対して適用するであろう個人Bのパースペクティブ，すなわ

ち，個人Bが考慮する個人Aのパースペクティブを考慮した上で，個人Bに対して身振りを発しなければならないことになる。再び個人Bの立場に立って考察するなら，個人Bも，個人Aが考慮する個人Bのパースペクティブを考慮した上で，個人Aに対して行為を行わなければならないことになる。すなわち，個人Aと個人Bの双方は，必然的に「単に自分が相手を考慮するだけというのではなく，逆に自分に対する考慮をも行っている相手として，その相手を考慮」(Blumer, 1969, p.109) しなければならないわけである。すなわち「考慮の考慮」と呼ばれ得る営みを個人Aと個人Bの双方は行わなければならないわけである。

如上の過程を経て，個人Aと個人Bの双方が，そこで用いられている身振りに対して，同じ意味を付与しているとき，そうした身振りのことをブルーマーは特別に「有意味シンボル」(significant symbol) と呼んでいる。またこの有意味シンボルのことを「普遍的なるもの」(universal) ないしは「共通の定義（意味）」(common definition［meaning］)とも呼んでいる(Blumer, 1967［1992, p.52］)。

ブルーマーによれば，この「共通の定義」が，ジョイント・アクションの規則性・安定性・再起性ないしはある一定の形態の固定的な反復を保障するという（Blumer, 1969, p.71）。すなわち「共通の定義によって，〔ジョイント・アクション形成への〕参与者達には，自身の行為を他者の行為と適合させるための，はっきりとした指針が与えられる。この共通の定義ということによって，様々な集団領域にまたがったジョイント・アクションの，規則性・安定性・再起性が最もよく説明されるのである」と（Blumer, 1969, p.71）。

シンボリック相互作用論においては，社会なるものは（したがって，ジョイント・アクションは）動的・過程的なものとして捉えられなければならない。これがシンボリック相互作用論の重要なテーゼの一つであった。ところが，上記のような，ジョイント・アクションの規則性・安定性・再起性を説くブルーマーの立場は，そうしたテーゼに反しはしないだろうか。というのも，ブルーマーの立場においては，ジョイント・アクションが（したがって社会が）動的なものとしてではなく，固定的なものとして把握されているかのように見えるからである。

無論，他方でブルーマーは，ジョイント・アクションには確かにそうした“規則性・安定性・再起性”が認められつつも，そうした“規則性・安定性・再起性”がジョイント・アクションの本来的な性質だと考えてはならない，ということをすかさず強調している。そのことについてブルーマーは「ジョイント・アクションの経歴は，多くの不確定の可能性にも開かれていると考えなくてはならない」

(Blumer, 1969, p.71) と述べている。すなわち「不確定性や偶然性や予期せぬ変容が，ジョイント・アクションという過程の重要な部分」(Blumer, 1969, p.72) として認識されなければならないとブルーマーは主張しているのである。つまり，ジョイント・アクションを固定的なものとしてではなく動的なものとして把握しなければならない，ということをブルーマーは主張しているのである。そのことは，ブルーマーが「ひとつの人間の社会を構成する様々なジョイント・アクションが，固定され確定された経路に従うように設定されていると考えるのは，全く根拠のないことである」(Blumer, 1969, p.72) と述べていることからも理解されよう。

本稿における我々の目的が，ブルーマーのシンボリック相互作用論において，社会が動的・過程的なものとして把握されなければならない所以を，自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに明らかにすることであることは第一節で述べたとおりである。この目的を達成するということは，ジョイント・アクションが動的なものとして把握されなければならない所以，すなわち＜“ジョイント・アクションの経歴は，多くの不確定の可能性にも開かれていると考えなくてはならない”所以＞ないしは＜“不確定性や偶然性や予期せぬ変容が，ジョイント・アクションという過程の重要な部分”として認識されなければならない所以＞を，自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに明らかにすることに他ならない。次節では，こうした観点に立って上述の目的を達成することにしたい。

三　動的・過程的なものとしての社会

何故にジョイント・アクションの経歴は，多くの不確定の可能性にも開かれていると考えなくてはならないのか。何故に不確定性や偶然性や予期せぬ変容が，ジョイント・アクションという過程の重要な部分として認識されなければならないのか。こうしたことを自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに明らかにするということは，自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに，ジョイント・アクションの規則性・安定性・再起性が維持され続けるということが不可能なことであるということを明らかにすることを意味する。換言すれば，共通の定義が維持され続ける可能性が存在し得ないということを，自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに証明することに他ならない。

前節において明らかにされたように，ブルーマーのシンボリック相互作用論において「共通の定義」とは「有意味シンボル」のことを指していた。したがって，共通の定義が維持されている状態とは，有意味シンボルが維持されている状態であると言える。では有意味シンボルが維持されている状態とは如何なる状態であったか。先に明らかにしたように，相互作用を行っている個々人が，そこで用いられている身振りに対して，各々の自己相互作用の過程を通じて，同じ意味を付与している状態であった。こうした状態をブルーマーは「ある身振りを呈示している人間が，その身振りが向けられている他者と同じように自らの身振りを見ている」状態であると表現している (Blumer, 1993, p.179)。こうした状態が維持され続けるためには，身振りを呈示している人間は，その身振りが向けられている他者を，ある一定の見方でその身振りを見ている他者として解釈・定義し，かつそうした解釈・定義が妥当なものであり続けなければならない[10]。さらに精確に言えば，そこで身振りを呈示している人間が想定した他者の“ある一定の見方”が，実際にその他者が採用している“ある一定の見方”と正確に合致し続けなければならないことになる。ところがそうしたことを不可能にする特性が，この“他者”にはあるのである。それを以下に明らかにしてゆこう。

ブルーマーによれば，シンボリック相互作用論においては，ある個人を取り巻く「世界」(world) とは，「対象」(object) から“のみ”構成されるものであると捉えられている (Blumer, 1969, pp.10-1)。故に，ある個人にとっての“他者”という存在もまた，その個人にとっての「対象」としての位置づけを有していることになる (Blumer, 1969, p.10)。

ところで「対象」とは，ブルーマーにおいては，個人がある一定の「パースペクティブ」(perspective) にしたがって知覚した（すなわち自己相互作用の過程を通じてある一定の意味を付与した)，「現実の世界」(world of reality) のある一定の部分を指すから[11]，「対象」とは，一方で個人によって知覚されたものであると同時に，他方で「現実の世界」のある一定の部分でもあるということになる。したがって，ブルーマーにおいては，ある個人にとっての“他者”という存在もまた，一方でその個人によって知覚されたものであると同時に，他方で「現実の世界」のある一定の部分でもあるということになる。

では，ブルーマーにおいては，その「現実の世界」とは如何なる特性を有するものとして捉えられているのか。

先に我々が明らかにしたところによれば（桑原，1996年ｂ)，「現実の世界」は，個人によるその世界に対する解釈や定義に対して“いつでも”「抵抗」(resist) ないしは「トークバック」(talk back) する（＝「例外的実例」(exceptional instance) を呈示する）ことが出来るという特性を持っているものとして捉えられていた。さらに，そうしたトークバックないしは例外的実例の発生を契機として，個人は自らの既存の解釈や定義の妥当性の如何を知ることができ，そうした解釈や定義を修正することになる，と捉えられていた[12]。

したがって，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，ある個人にとっての“他者”という存在もまた，いつでもその個人によるその“他者”に対する解釈や定義に対してトークバックする（＝例外的実例を呈示する）ことが出来るという特性を持っているものとして捉えられていることになる。さらに，そうしたトークバックないしは例外的実例の発生を契機として，その個人は自らの既存の解釈や定義の妥当性の如何を知ることができ，既存の解釈や定義を修正することになるものとブルーマーにおいては捉えられていることになる。

以上の議論から次のことが結論づけられる。すなわち，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，「共通の定義」なるものが永久に維持され続けるということは本来的に不可能なことことして捉えられなければならない。何故なら，共通の定義が維持され続けるためには，身振りを呈示している人間は，その身振りが向けられている他者を，ある一定の見方でその身振りを見ている他者として解釈・定義し，かつそうした解釈・定義が妥当なものであり続けなければならないが，解釈・定義されるその“他者”には，“いつでも”そうした解釈や定義に対してトークバックする（＝例外的実例を呈示する）ことが出来るという特性があり，それ故，そうした解釈・定義が修正されなければならない可能性が“いつでも”存在していることになるからである。したがって，ブルーマーの視点からすれば，身振りを呈示している人間が，その身振りが向けられている他者を，ある一定の見方でその身振りを見ている他者として解釈・定義し，かつそうした解釈・定義が妥当なものであり続けるということは不可能なことと捉えられなければならないのである。したがって，ブルーマーのシンボリック相互作用論の立場からすれば，「共通の定義」が維持され続けるということ，すなわち“ある身振りを呈示している人間が，その身振りが向けられている他者と同じように自らの身振りを見ている”状態，ないしは“相互作用を行っている個々人が，そこで用いられている身振りに対して，各々の自己相互作用の過程を通じて，同じ意味を付与しているという状態”が維持され続けるということは不可能なことと捉えられなければならないのである。故に，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，ジョイント・アクションなるものは本来的に動的なものとして把握されなければならず，そうしたジョイント・アクションから構成される「社会」なるものもまた動的なものとして把握されなければならないことになるのである。

以上，本稿における議論を踏まえるならば次のように結論づけることが出来る。

すなわち，シンボリック相互作用論という視点を採用するなら，社会は“必然的に”「動的・過程的なもの」として捉えられなければならない。したがって，“既存の”「社会構造」概念はシンボリック相互作用論の社会観が有する性格とはそもそも相容れないものであり，故に，シンボリック相互作用論に対してかねてより寄せられてきた前記第二のような批判は，そもそもシンボリック相互作用論に対する批判として妥当なものではない，と言わざるを得ない[13]。

＜註＞

1）ブルーマーのシンボリック相互作用論とシカゴ・ルネサンスとの関係については，吉原の議論（吉原，1994年，53－4，74頁；1989年，24頁）を参照。

2）「………社会学は現在，さまざまな理論的パースペクティブが乱立して競合し，〔その〕アイデンティティが根底から揺るがされるほどの状態にある」（鮎川，1994年，183－6頁）と言われる現代社会学において，シンボリック相互作用論は「こんにち，現代社会学の主要潮流の一つを形成するものとなっている」（船津，1993年，45頁）との位置づけを有するとされている。一口にシンボリック相互作用論とは言っても，そこには例えば，人間の主体的あり方を理論的に解明しようとする「シカゴ学派」，自我の経験的・実証的研究に取り組んでいる「アイオワ学派」，ミード理論をワトソン流の行動主義との関連において再検討し，独自の社会的行動主義の展開をめざす「イリノイ学派」，そして，人間の行為や社会のあり方を演技やドラマとして捉え，それを具体的な相互作用場面において解明しようとする「ドラマ学派」等があるが（船津，1995年，４頁)，本稿においては，シンボリック相互作用論を検討するに際して，そのような種々のシンボリック相互作用論のなかでも「現代のシンボリック相互作用論の特徴を余すところなく表現し，包括性，体系性において，他を凌駕し，今日のシンボリック相互作用論のよるべき大樹」（船津，1976年，40頁）としての位置づけを有するとされる，ブルーマーのシンボリック相互作用論を検討素材として選択することにしたい。

3）拙稿（桑原，1996年ｂ，82，94－5頁）及び［船津，1994年］参照。

本稿においては，ブルーマーのシンボリック相互作用論が持つ二つの側面，すなわち，分析枠組の側面と研究手法の側面のうち，分析枠組の側面に焦点をあて，以下論を展開してゆくことにしたい。というのも，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，

研究手法とは，ブルーマーが分析枠組において描いているとする「行為者が日常的におこなっていること」を洗練させたものに他ならず，そのため，ブルーマーの研究手法の原型を探るという意味でも，まずもってこの分析枠組を検討することが必要となるからである（桑原，1996年ｂ，95頁）。こうした研究手法と分析枠組との関係について以下，少々詳しく述べておくことにしよう。

上記の様なブルーマーの立論は，プラグマティズムの思想と深く関連している。シンボリック相互作用論が「まず何よりもプラグマティズムの影響下にアメリカで誕生」（マーチンデール，1970年，406頁）したことは今や周知のことであるが，もとよりブルーマーのシンボリック相互作用論の場合も例外ではない（船津，1976年，27頁）。ハマーズレイによれば，そのプラグマティズムの思想においては，科学や哲学とは，人間の理性的思考の雛形として認識されていた（Hammersley，1989，p.46）。そのことについて，ハマーズレイは以下のように述べている。

「哲学及び科学は，日常生活における諸問題からたち現れ，その問題の解決に向けられる。………多くのプラグマティスト達は，科学を，人間の知識がそうあるべき雛形として見ており，同時に，人間の知識を発展するものとして，その結果として，人間同士の相互適応及び人間の環境に対する適応を漸進的に促進するものとして見ていた。」（Hammersley，1989，p.46）

さらにこうした思想が，ブルーマーのシンボリック相互作用論の分析枠組と研究手法の形成過程に多大な影響を及ぼしたとハマーズレイは見ている。彼によれば「シカゴ学派社会学，さらにハーバート・ブルーマーの方法論的な諸見解の展開に対して，最も重要な影響を与えた哲学思想はプラグマティズムであった。ブルーマーやその他のシカゴ学徒が，人間の社会生活の特性に関する自らの諸見解の多くや，同時に方法論的な見解の幾つかを引き出したのは，まさにこのプラグマティズムからであった」（Hammersley，1989，p.44）。

こうした見解を事実ブルーマーも認めている。ブルーマーにとって科学とは，人間の内省的知性の理想的形態を意味する。また科学的手法とは，日常的手法を単に伸長ないしは洗練させたものに他ならない。ミード同様に，ブルーマーのシンボリック相互作用論においてもこうした考え方は変わらない。この様にブルーマーは述べている（Blumer，1980，p.415）。さらにブルーマーが提示する（社会）科学的手法としての「自然的探求」（naturalistic investigation）法（＝ブルーマーのシンボリック相互作用論の研究手法）（補註１）も，日常的手法を単に洗練させたものとして，ブルーマーにおいては位置づけられているのである（Blumer，1980，p.415）。

こうした意味で，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては「科学者と経験的世界との関係が如何なるものであるのかについての議論が，行為者と世界との関係に関する議論に重ね合わされている」のである（桑原，1996年ｂ，94頁）。

４）第一の批判に関しては，メインズ等の見解（Maines and Morrione，1990，xiv-

xvii）及び宝月の見解（宝月，1988年，150－９頁；1989年，２－４頁）が示唆的である（補註２）。また，第三の批判に関しては，拙稿（桑原，1996年b，第１節及び第２節）を参照されたい。

５）従来の議論においては，ブルーマーのシンボリック相互作用論において，社会が動的・過程的なものとして把握されているということが，その重要なテーゼとして強調されつつも，そうしたテーゼが，いわば自明視されていた傾向があり，必ずしもブルーマーにおいて社会が動的・過程的なものとして把握されなければならない必然性が明らかにされてこなかったと思われる（補註３）。本稿では，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては何故に社会は動的・過程的なものとして把握されなければならないのか，その論理的必然性を明らかにすることにしたい。

６）〔ウォーラス・ウルフ，1985年，299頁〕参照。さらに，この自己相互作用概念があるからこそ，ブルーマーのシンボリック相互作用論は，彼独自の社会学的・社会心理学的パースペクティブとしてそのアイデンティティを確保しているといっても過言ではないのである。ブルーマーによれば「シンボリック相互作用論というパースペクティブは………人間の行為を研究する上で，自己相互作用の過程を何よりも重要なものと考える唯一の分析枠組なのである」（Blumer，1993，p.191）。

この自己相互作用概念の内実については，簡単にではあるが別稿において触れておいた（桑原，1996年ｂ，86－７頁）。今や，ブルーマーのこの自己相互作用概念は，社会学における重要な概念のひとつとしての位置づけを有している，と言っても過言ではない（安川，1993年 ab；森岡清美・他，1993年参照）。

７）そうした意味で，ブルーマーにおいては，行為者の「行為」とは，行為者の他者達に対する適応活動のことを意味していたと言える。詳しくは拙稿（桑原，1996年ｂ，85，96頁）を参照されたい。

８）ここで何かを「考慮する」（take into account）とは，ブルーマーにおいては，自己相互作用の過程を通じて，その何かにある一定の意味を付与することと同義として扱われているものと思われる（Blumer，1969，p.64，80）。このことは，ブルーマーが「考慮する」ということを「相手を考慮するということは，その相手をはっきりと意識し，何らかの形で識別し判断し，その相手の行為の意味を見極め，また何を考え何を意図しているのかを見い出そうとすることを意味する」（Blumer，1969，p.109）と表現しているところからも理解されよう。

９）〔Blumer，1969，p.2，5，10-1，14，79，80〕及び拙稿（桑原，1996年ｂ，90頁）参照

10）こうした解釈や定義という営みも，個々人の自己相互作用の過程を通じてなされているものであるということは言うまでもない（Blumer，1969，p.5）。

11）拙稿（桑原，1996年ｂ，90頁）参照

12）詳しくは，拙稿（桑原，1996年ｂ，第３節）を参照されたい。

13）本稿では「動的・過程的なものとしての社会」というテーゼを掲げるブルーマーのシンボリック相互作用論の分析枠組それ自体の社会理論としての妥当性については検討することができなかった。そうした点について検討を行うためには，ブルーマーのシンボリック相互作用論が生まれた土壌であるアメリカ社会とブルーマーの分析枠組との関係に関する知識社会学的研究が必要となる（片桐，1989年，iii；1991年，７－８頁；下田，1987年，349－50頁）。さらに，ブルーマーのシンボリック相互作用論が「みずからのルーツとしてシカゴ学派を位置づけ，その伝統の継承と現代的展開を企図」（伊藤，1995年ｂ，22頁）したものである以上，シカゴ学派社会学の知識社会学的研究も必須の課題となる。こうした事柄については，本稿では紙幅の都合で述べることができなかった。別の機会に論じてみたいと考えている。